

9月



2024年

みやま

第316号

病院理念

『患者さまの不安をとること』

当院の基本方針

「地域に根ざした安心できる医療」

「精神科医療の充実」

「老人医療」医療と福祉の結合

医療法人社団光生会 平川病院

〔ホームページ〕 <http://www.hirakawa.or.jp/>



栄養科 田中 康之 管理栄養士



左側) 国際医療福祉大学 成田保健医療学部
言語聴覚学科 石山寿子先生

当院の栄養科 田中康之管理栄養士がシンポジストとして発表しました

院長 平川 淳一

令和6年8月30日に第30回日本摂食嚥下リハビリテーション学会が開催されました。この中で企画された「精神疾患の摂食嚥下障害」というシンポジウムで、田中康之管理栄養士がシンポジストとして登壇し、平川病院での患者さんへの細かな個別対応、それを達成するためのシステム、精神疾患患者の栄養面での知見などを発表しました。たいへん好評で、会場からも感嘆のコメントや質問をいただきました。当院の管理栄養士は7人います。法的には1人でいいことになっていますが、病棟ごとに担当を決め、個別に管理栄養士が治療者の1人として病棟のカンファレンスにも参加し、多職種連携の有効なコミュニケーションの中で医師の指示待ちにならず患者さんの状態に応じた食事を提案するようなシステムであるため、7人でも足りないくらいです。これに歯科医師、歯科衛生士や言語聴覚士などが一体的になり摂食嚥下チームを形成しています。私は彼らを自慢に思いますが、1番の自慢は一言、「美味しい」ということです。患者さんの中にはいろいろな病院への入院歴のある方がいらっしゃいますが、ここはご飯が美味しかったと言って退院される患者さんが多いと思います。もちろん、私自身も必ず昼飯は病院食を食べています。これからも栄養科には治療者として美味しい食事を提供してもらいたいと思います。

【表紙】 院長あいさつ 【P2】 第4回日本成人期発達障害臨床医学会参加レポート 【P3】 (リレー記事) 作業療法科より 【P4】 (病棟たより) 東3病棟より 【P5】 今年のオレンジガーデニングプロジェクト 【P6-7】 (特集記事) 摂食嚥下リハビリテーション 【P8】 第36回 東京精神科病院協会学会演題紹介・編集後記

第4回日本成人期発達障害臨床医学会に参加しました

地域生活支援室より

地域生活支援科 科長 石橋 さおり

7月27日（土）・28日（日）に、横浜で開催された日本成人期発達障害臨床医学会に参加しました。2日目の一般演題で地域生活支援科の公認心理師鎌田哲司が発表した「デイケア参加継続率を高めるための取り組みについて」を報告します。

2018年より当院で「発達障害専門プログラム」を開始した中で、コミュニケーションの困難さや多人数参加のプログラムに参加すること自体が課題となることがありました。そこで、参加の継続を支援するための補助的なプログラムとして、2021年から「発達理解プログラム」を開始し、2つのプログラムの併用がデイケアの参加継続に与えた効果について検証しました。

「発達障害専門プログラム」はコミュニケーションに関する内容を中心に、障害特性の理解や感情のコントロールなどの心理教育、参加者同士でディスカッションを行います。一方、「発達理解プログラム」は、必ずしも言語を必要としないボードゲームやカードゲームなどの遊びや交流を中心とした活動を行い、デイケアに対する安心感を得て、多人数参加のプログラムへの抵抗感を軽減することを目的としています。

研究では、自閉症スペクトラム障害の方10名を対象に、①特定の状況で目標を達成するために自分の能力をどれだけ信じているか（自己効力感）、②生活の質（QOL：健康・幸福・社会的関係・環境等5つの要素）について、調査を行いました。

結果は、「発達理解プログラム」との併用の参加者は、「発達障害専門プログラム」参加後にQOLの社会的領域で効果が示されました。社会的領域とは、他人との関係やサポート体制の認知に関するもので、人間関係や友人の支えに対する満足感など、他者とのかわりに関する項目が含まれます。デイケアという居場所としての社会的支えが得られたことでプログラムに参加継続でき、人間関係に対する満足感を実感できたのではないかと考えています。そして、その結果、「発達障害専門プログラム」修了後も、デイケアの他のプログラムへの参加継続につながり、発達障害の方に限らないデイケアメンバーやスタッフとの交流をきっかけに就労支援施設等の利用に繋がった方もいました。

今回の参加で、発達障害に関する知見を深め、自分たちの支援の振返りもできました。これからも学び、日々の中で工夫し、効果的な支援を提供していきたいと思えます。



演者) 地域生活支援科 公認心理師 鎌田 哲司

VR機能を活用したSSTを作業療法科で実施しています



リレー記事

作業療法科 岡本 晃宜

「FACEDUO(フェイスデュオ)」は、VR(仮想現実)機能を用いたバーチャル映像によって社会生活のさまざまな場면을教材化した、SST支援プログラムです。患者さんが社会で人と関わりながら生きていくために必要となるソーシャルスキルの獲得・向上を目的に開発されました。

特徴① 患者様と状況共有しやすい

患者様の治療の段階に併せ、地域生活準備・日常生活編・仕事編の3つのカテゴリーに分かれており、多数のコンテンツが用意されています。VRで「限りなくリアルな当事者体験」が再現されているため、患者様と支援者の状況共有がスムーズに行えます。

特徴② 経験の少ないスタッフも実施しやすい

セッションのポイントや進行方法、質問例などを記載した進行ガイドも用意されており、スムーズに支援者が進行することができます。他部署の皆様も患者様の個別介入等で活用できます。

VRコンテンツの中には、相手の感情を読む力を鍛える感情認知トレーニングというものもあります。「相手の感情を推測する」方法や、「相手の感情に合わせた対応をする」方法を学ぶこともできます。

作業療法科では上記のFACEDUOを使用して全6回、6名程度の少人数で行うSSTプログラムを実施しています。プログラム名は『土筆プログラム』です。なぜ『土筆』か?と言いますと、土筆の花言葉には「努力」、「向上心」、「意外」、「驚き」といった意味があります。プログラムに参加した患者様が社会生活をより良くするために向上心を持ち、努力して理想とする生活を送れるようになること、またはプログラムの回数を重ねる度に見違える姿に、

病棟職員があっと驚くようにと願いを込めて『土筆プログラム』に命名しました。今回はさまざまなコンテンツの中から事前に職員が対象の方に必要な練習項目を選択し、そのVR映像を観ながらコミュニケーションの練習を行っています。開始当初は新しいプログラムに緊張感はありましたが、初めてのVRに皆さん興味津々でした。VRの映像を観た後に、より良いコミュニケーションを図るための工夫を挙げてもらっていますが、回を重ねるごとに具体的な工夫点が挙がるようになり、参加者同士で褒め合う場面も多くみられるようになっています。

小集団のプログラムに苦手意識をお持ちの方、直接話をすると緊張してしまう方等々、FACEDUOを活用することで個別でもSST支援プログラムを実施する事は可能です。もし興味がありましたら、作業療法科までお声掛けください。



外出訓練を再開しました

病棟だより

東3病棟 看護師 木村 俊一

新型コロナウイルス感染症は、国内では2020年1月15日頃に初めて確認されました。世界的には、2019年12月30日に中国で最初の患者が発症し、その後、世界中に感染が広がりました。日本でも2020年4月16日に全都道府県を対象に緊急事態宣言が発出されました。これにより、あらゆる生活様式が制限され、経済にも大きなダメージを与えられました。しかし、2021年3月21日に緊急事態宣言が全面解除され、2023年5月8日からは新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に位置付けられました。

当院でも制限が緩和され、面会、施設等への見学などが条件付きで再開されました。東3階慢性期病棟では、「自信を持って退院に気持ちが向くには」を題材に病棟カンファレンスが開かれ、ADLは勿論、IADLも必要であるという意見が出され、病院外に目を向け社会との接点が必要だと話し合われました。これを受け、感染症の影響で制限されていた外出訓練を再開し、患者さんが社会に目を向け、退院への自信や動機に繋がることを目指して取り組むことになりました。

ただし、感染状況としては依然としてリスクがあるため、スタンダードプリコーション（標準予防策）に加えて感染経路予防策を徹底し、安全を確保することで外出が可能となりました。また、より安全性を高めるため、交通手段としては病院バスを利用し、安全への配慮を行いました。

購入品目については、担当看護師と共に購入希望品や必要な物をリストアップし、各々で購入商品や金額の設定を行い買い物に行きました。

外出中には、店舗で購入できる品目のイメージがついていなかった様子で「こんな物が買えるんだ」「便利になっている」などと、改めて制限の影響を実感する声が聞かれました。

外出後には、「疲れたけれどまた参加したい」「必要な物が購入できて嬉しかった」「次は衣類を購入したい」といった多くの意見が寄せられました。今後も安全に配慮しながら外出訓練を行い、退院に向けた足掛かりとなるよう取り組んでいきたいと考えています。



今年のおレンジガーデニングプロジェクトについて

南多摩医療認知症疾患医療センター センター長代理 精神保健福祉士 椎名 貴恵

オレンジガーデニングプロジェクトは、認知症になっても暮らしやすいまちをみんなで作っていくことをめざして、認知症啓発のシンボルカラーであるオレンジ色の花を咲かせようというプロジェクトです。9月21日は世界アルツハイマーデーで、9月には全国各地で認知症について理解を深めるための様々なイベントが行われています。

その一つとして、八王子市では令和4年からRUN伴はちおうじが発起人となり「オレンジガーデニングプロジェクト」が行われています。(RUN伴はちおうじのホームページやFacebook「オレンジガーデニングプロジェクト」について八王子市内の活動をみていただくことができます)



令和4年度 八王子市役所



令和5年度 八王子市役所

平川病院でも令和4年から色々な方々と一緒に八王子市役所をオレンジ色の花で飾りました。2年続けて、八王子市役所をオレンジ色に飾ってきましたが、平川病院をオレンジで飾ることを忘れていた・・・！と気づき、今年は病院の正面玄関前にある花壇をマリーゴールド色にすることにしました。

認知症についてより多くの方に関心を持っていただけるよう、ただお花を飾るだけでなく、アネックス病棟に入院している患者様が作ってくださった飾りなどで彩りたいと思っています。

9月の街かどでオレンジ色の花を見つけたら「オレンジガーデニングプロジェクトかな？」とちょっと立ち止まってみていただくと嬉しいです。

RUN伴はちおうじの情報

ホームページ



フェイスブック



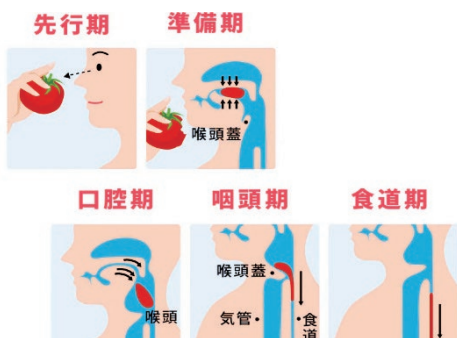
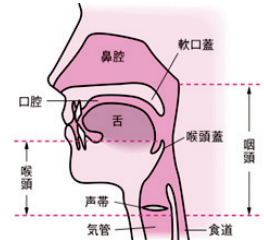
特集 摂食嚥下リハビリテーション

『摂食嚥下』・・・食べ物を口に入れてから、飲み込み、食道から胃に送るまでの過程

普段私たちが物を食べる時、意識して物を飲み込むことは殆どありません。しかし、実はこの仕組みはとても複雑で多くの器官の動きが組み合わさって動いています。

そのため、脳や神経に障害を有する場合や、高齢で筋力低下や反射神経の低下が起こると嚥下が上手くできないことがあります。

食べ物を口に入れ、嚥下するまでの過程は、おおまかに5つに分けられます。(嚥下5期)



先行期

最初に目や鼻などで目の前の物が食べ物であることを認識し、口に運びます

準備期

口の中で食べ物を噛み、かたまり(食塊)にします

口腔期

その食塊を、舌を使って喉の奥に運びます

咽頭期

「嚥下反射」という機能が動いて食塊が咽頭を通過し、食道に入ります

食道期

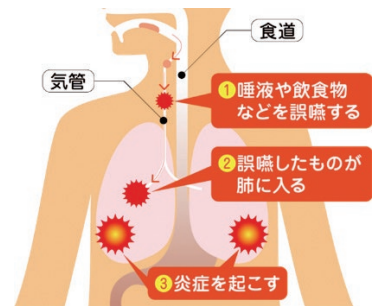
食道から胃へと運ばれます

ネスレホームページより

1. 摂食嚥下障害とは？

前述のプロセスのうち1つ、又は複数以上が正常に機能しなくなった状態を言います。

- 食べ物が上手に飲み込めない「**嚥下困難**」
 - ☞ 低栄養や脱水を引き起こす
- 飲み込んだものが誤って気管に入り込んでしまう「**誤嚥(ごえん)**」
 - ☞ 窒息、肺炎の可能性を招く
- 上手に食べられないことが原因となる「**食べる楽しみの喪失**」
 - ☞ 生きる意欲の低下に繋がる危険性



石川県言語聴覚士会ホームページより

2. こんな症状はありませんか？

このような症状が続くときは摂食嚥下障害が疑われます。



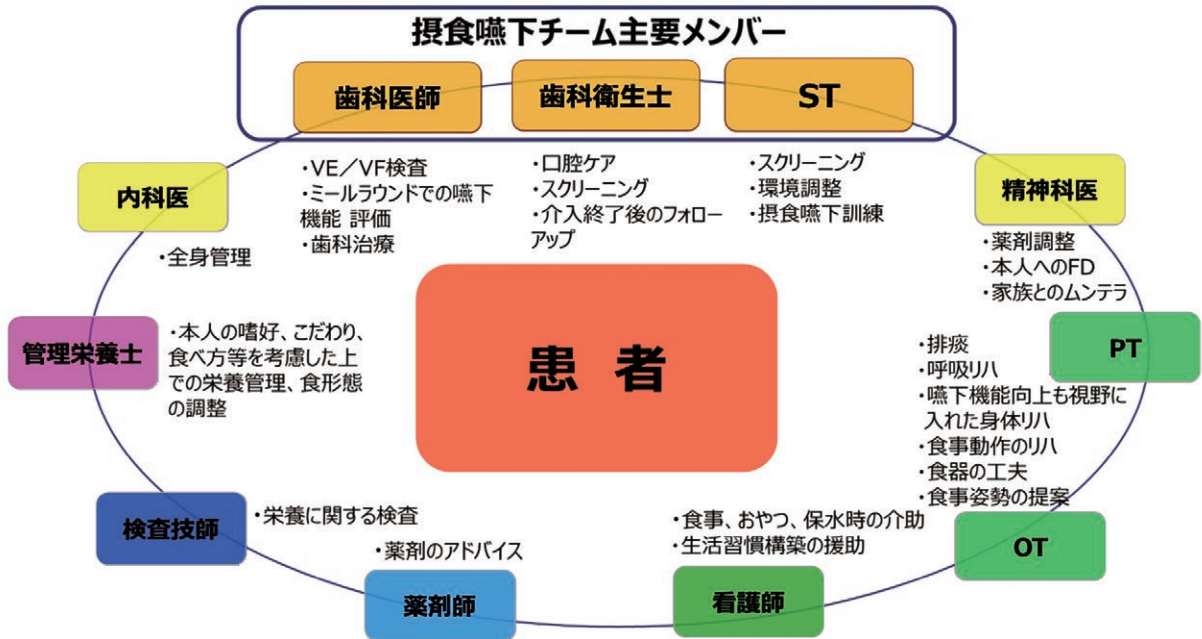
この他にも…

- 唾液が飲み込めずに吐き出してしまう
- 口が乾く、飲み込むときに痛みがある
- 声や呼吸がガラガラする
- 常に喉がゴロゴロしている
- 痰が多く、口や喉が汚い
- 発熱や肺炎を繰り返す
- 食後に痰や咳が増える
- 食事をすると疲れる
- 食欲がない
- 体重の減少



などの症状も摂食嚥下障害が原因で起こっていることがあります。

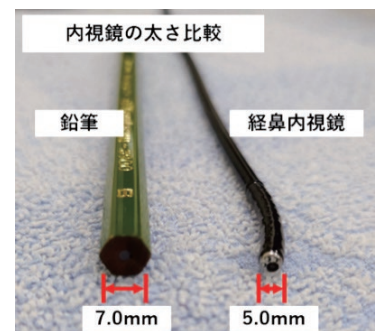
3. 摂食嚥下チームの紹介



当院は歯科室を備えており、入院患者や地域外来患者の口腔機能維持を図る取り組みを行っていることが大きな特色です。その歯科室と病棟と連携して結成しているのが「摂食嚥下チーム」です。歯科医師、歯科衛生士、言語聴覚士を主要メンバーとし、内科医、精神科医、看護師、管理栄養士等で構成されています。低栄養の患者様や摂食嚥下障害の疑いのある患者様に対して、VE、VF検査を導入し、その評価に応じた摂食嚥下リハビリテーションを実施しています。症例によって、理学療法士、作業療法士等も関与しながら多職種での介入を行っています。私達はこのような嚥下障害の症状を持つ患者様に対し、様々な職種と連携し、おのこの方向からのアプローチを行なっています。食べる事の維持や回復過程は、1つの要因だけで決まるわけではありません。安定した摂食姿勢、食物形態の調整、安全でセルフケア拡大を意図した食事介助スキルなどが重要です。

4. 嚥下内視鏡検査 (VE) ってなに？

内視鏡を鼻から入れて、喉を観察します。実際に食べ物を食べてもらい、口から喉、食道へ食べ物がどのように通過するか、喉にどの程度残るか、などを直接観察します。



モニターを見て誤嚥していないか、痰や唾液が貯留していないか確認

退院後もフォローします！

次号は
外来診療、訪問を行っている
陵南診療所
摂食リハビリステーション
を特集します！！

第36回 東京精神科病院協会学会 演題紹介

開催日 令和6年10月22日(火)

会場 京王プラザホテル



当院から4演題発表いたしますので、ご紹介させていただきます。

- ◆ IAD（失禁関連皮膚炎）対策のための予防的スキンケアの取り組みと実践報告
～オムツ交換回数削減による患者のQOLの向上～
急性期病棟 主任 黒部 美恵
- ◆ 認知症を持つ人の役割の再獲得から「生きがい感」に介入した事例
作業療法科 佐藤 優花
- ◆ 癌にうつ病を呈した飛び降りによる外傷患者への多職種による関わり
リハビリテーション科 主任 奥出 聡
- ◆ 訪問看護に同行し管理栄養士が行った食支援の報告
栄養科 遠藤 優おこな

当院は南多摩医療圏の地域拠点型認知症疾患医療センターです

東京都では、平成24年に指定された「地域拠点型認知症疾患医療センター」12カ所（当院含む）と平成29年11月迄に指定されている「地域連携型認知症疾患医療センター」40カ所、合わせて52カ所の医療機関において、認知症の人とその家族が安心して暮らせる地域づくりを進めています。認知症に関するご質問がありましたら、各地域のセンターまでお問い合わせ下さい。尚、センター指定状況や役割の詳細等については、東京都公式ウェブサイト『とうきょう認知症ナビ』でご確認いただけます。

[とうきょう認知症ナビ](#)

[検索](#)

編集後記

先月よりパリにて開催されているオリンピック・パラリンピック。オリンピックでは日本勢のメダルラッシュが続き、序盤までメダル獲得数1位という素晴らしい成績。輝かしい結果の裏でこれを機に引退を決意しコートに泣き崩れる選手も印象的だった。スポーツの世界でも世代交代が囁かれる今日、お隣のアメリカでは現職大統領が高齢を理由に立候補を取り下げ、大統領選の対立がいつそう激化。色々な意味で、日本にとって左右する選挙戦。11月まで目が離せなさそうだ。

医療法人社団光生会 平川病院

東京都八王子市美山町1076

電話 042-651-3131

FAX 042-651-3133

編集 平川病院 広報委員会

ご意見ご感想はこちらへお願いします

kouhou@hhsp1966.jp

HIRAKAWA
HOSPITAL

